

## 特集「私たちを取り巻く色彩環境の構造と色彩感覚」

Special Issue: The color structures of natural environments and our color sensations

## 太陽の色—その連想・描写

Color of the Sun : its Associations and Depictions

日高 杏子

Kyoko Hidaka

芝浦工業大学デザイン工学部

College of Engineering and Design, Shibaura Institute of Technology

キーワード：太陽の色、連想、旗、擬人化、黒い太陽

Keywords : colors of the Sun, associations, flags, anthropomorphism, schwarze sonne

## 1. はじめに

今、この文章を読んでいるあなたは、太陽を何色で描くのだろうか？太陽系惑星に光と熱をもたらす恒星—太陽。地球上で生活する人類のほとんどが太陽を認識し、恩恵を受けているはずで、本特集「私たちを取り巻く色彩環境の構造と色彩感覚」に欠かせない変動要因である。太陽の色の連想と描写を軸に、国・地域、言語ごとに独自性が生じる要因やシンボルについて想いを馳せたい。

太陽や天体の色についての認識の起源を議論した福江(2012)によれば、(1)物理的性質、(2)生理的原因、(3)心理的要因、(4)文化的背景、(5)認識論、(6)デジタル処理の問題が起源として挙げられている<sup>1)</sup>。太陽の色の連想と描写は、世界中の文化で差異がある。太陽への信仰、国旗、シンボル、芸術様式に基づいた独自の解釈や描写がなされてきた。太陽の色の選択には、その国の文化や言語が織りなす世界観が反映されている。

## 2. 色の連想

「赤い太陽は世界では少数派」と三島は1987年に記した<sup>2)</sup>が、はたして事実だろうか。筆者が2023年1月に監修した国際調査を紹介したい。2023年1月12日～26日に実施した「赤から想起するもの世界100カ国調査」<sup>3)</sup>の設問の一部として、太陽の色の連想を尋ねた。この調査自体は、株式会社博報堂の広報雑誌『広告』417号のテーマ「文化」との連動企画である<sup>4)</sup>。調査目的は、赤色が持つ意味の共通性と差異を可視化し、文化やその背景にある風土、伝統、宗教、思想について読者に考えてもらう点にある。

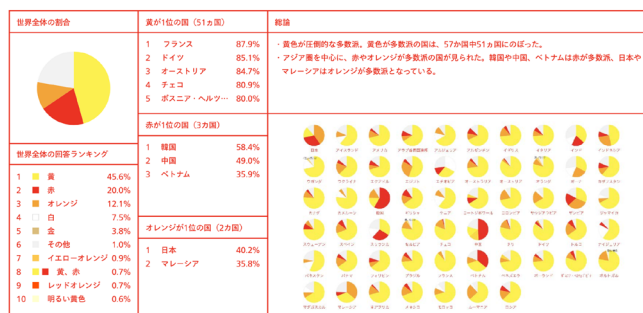
設問の一部で「太陽の色で何色を想起するか？」を記述式で答えてもらった。12,015名(うち日本人回答者は2,080名)の調査結果では、黄色、赤色、オレンジ色、白色などがあり、世界的には黄色と連想した回答が圧倒的多数派であった。

表1は、100カ国全ての回答の総合順位である。1位

は黄色で45.6%、2位は赤色で20.0%、3位はオレンジ色で12.1%という結果となった。その後に白色、金色が続く。アジア圏を中心に、赤が多数派は韓国や中国とベトナムで、オレンジが多数派は日本やマレーシアという結果が出た。世界全体から見ると、太陽を赤色やオレンジ色と連想し、描写する国民はマイノリティでアジアのみに偏っていることがわかった。

表1 太陽の色についての調査結果(黄色が大多数)

## 太陽の色



## 3. 気候と環境

太陽の色は、場所や気候によっても違って見える。佐藤(1999)は、地理的条件と太陽光に注目した。佐藤は日照時間や照度が異なることが色の好みの違いの一因と述べた。例えば、太平洋岸と日本海側では、年間で250時間以上の日照時間の差があると言われている。国内だけでも日照時間の差がこれほど大きいのであれば、海外の地域と比べると、色の認識や嗜好もさらに多様化する可能性がある。佐藤は、「江戸の青富士」「駿河の紫富士」「甲州の黒富士」「遠江の赤富士」という例を挙げて、環境光が富士山の色の変化にどのように影響するかを比較した<sup>5)</sup>。確かに、同じ富士山でも、光の源の向きや強さが異なれば、見え方も異なるであろう。

北欧ノルウェーを代表する画家、ムンクの『太陽』(図1)は白く、水平線に近くあり、放射線状に赤、黄、緑、青などの色を放つ。北欧圏の夏至近くは白夜状態

で太陽が沈まないが、この太陽はその描写かもしれない。

図2は江戸末期の浮世絵版画で、横浜の海の風景を描写している。東側に見える房総半島の向こうに放射状の赤線が描かれ、赤い朝日が登る木版画である。日本の旭日旗に見られるように、太陽は様式化されて描写されてきた。ムンクのノルウェーの太陽と歌川匡輝の横浜の朝日、いずれも彼らの生活環境や伝統的絵画様式でとらえた太陽の色の描写の作例といえよう。



図1 エドヴァルド・ムンク (1863-1944)  
『太陽』(1911) 油彩, キャンバス, オスロ大学蔵



図2 歌川匡輝(二世)一蘭齋國綱画  
『東海道神名川横濱風景』文久3年(1863)  
木版画, 東京都立中央図書館蔵

## 4. 色の描写

### 4.1 スペインの幼児が描く太陽の色

バスク大学のヴィラロエルら(2017)は、4歳～8歳の279名の幼児(女子156名, 男子123名)が自発的に描いた279点の絵の中で、太陽をどのように表現しているかを調査した。絵の内容を分析し、教育レベ

ルや性別との相関性を調べている。この調査では、幼児の絵における太陽の描写に関連する変数として、①太陽が描かれているか否か(カテゴリー変数)、②他の要素のリスト(カテゴリー変数)、③太陽の色と総面積(連続変数)を検討している。研究者たちは、デジタル化とソフトウェアを使って、連続変数として扱われる太陽の色と面積を測定した。絵を調査した結果、32.6%( $n=91$ )の絵に太陽の描写があったことを紹介している。いずれも、子どもたちは太陽を上部に円形で描いており、右上に44名、左上に23名、中央に24名が描いている。太陽を「黄色」にした幼児が83.5%と大半を占め、9.9%がオレンジを選び、その他の色を選ぶ、色をつけない幼児も少数いた。

注目すべきなのは、24.2%の子どもたちが、人間の顔立ちや感情表現がある擬人化した太陽を描いたことである。擬人化した太陽の絵と教育レベルや性別との間には有意な相関はなかったが、擬人化した太陽の絵と「太陽は生物である」という信念の間には有意な関係が見られた<sup>6)</sup>。太陽に顔を描くことが多い文化では、太陽を生き物と認識して育つ幼児が多い結果といえる。ちなみにエリック・カール著の著名な絵本『はらぺこあおむし』に描かれた太陽はオレンジと黄色が混ざり、顔が描かれている。

### 4.2 日本の小学生が描く太陽の色

では、日本の子供の絵の場合はどのような調査結果になったのだろうか。小高(2021)も小学校低学年に白い画用紙と色のついた画用紙に太陽の色を描かせる実験をおこない、加えて絵本や教科書に描かれた太陽の色も調べた。日本の小学校低学年の結果は「赤色・オレンジ色」が多く、黄色もいたが少数派である<sup>7)</sup>。

## 5. 神話と擬人化

絵文字「顔付き太陽☀️」が知られている。これはオレンジ色～黄色と分類しやすい色に、表示プラットフォームの違いはあるが、Apple OSの場合は目鼻口がついている。太陽に顔を描く慣習は、9世紀以降15世紀までの間に成立した可能性があるといわれる<sup>8)</sup>。太陽を擬人化、神聖化する伝統や神話は、世界中のさまざまな信仰体系に見られる。しかし、これらの生き物・擬人化の内容が文化によって異なっている。太陽に性別を持たせ、男性、もしくは女性と看做す文化もある。この認識の違いが、太陽の色の連想や描写、さらには世界観の差異につながるヒントが潜んでいる

かもしれない。次に代表的な太陽の擬人化を紹介するが、太陽信仰は世界中に数多く存在する。

### 5. 1 エジプトのラー、ホルスなど／バビロニアのウトウ

中近東社会の始祖であるエジプト・メソポタミア文明は両方とも太陽神を持つ。古代エジプトでは、太陽神ラーが最重要な神とされた。太陽は生命の源で、豊かさや創造の象徴として崇められた。彼は朝に東の空から現れ、夜には西の空に沈むと信じられていた。ラーは人間の体に隼の頭、頭上には太陽を象徴する球がついていて、太陽の船に乗り、空を航海するとされる。

バビロニアでは、太陽はウトウ（シャマシュ）という髭を生やした長い腕の男性で描かれた。バビロニアの大神殿装飾では、4階に黄色い光を放つ太陽が描かれていた<sup>9)</sup>。翼のついた太陽のシンボルが描かれることもある。

### 5. 2 ギリシャのヘリオス

ヨーロッパ社会と科学に影響をもたらしたギリシャ神話では、ヘリオス（アポロンと同一視される）が太陽神として崇められた。ヘリオスは美しい男性の姿で、光り輝く4頭立て馬車に乗り、毎日東から昇り西に沈む太陽を運ぶとされた。ヨーロッパの詩や文学で「黄金の太陽」と比喻されるが、これは太陽の輝きを示す。

さらに、抽象化された古代ギリシャの太陽の描写で「ヴェルギナの太陽」がある。今もマケドニア国旗モチーフにも使われている。

### 5. 3 マヤ、アステカ、インカの太陽神

中南米の古代文明で太陽信仰が重要な要素であった。マヤ文明（2000B.C-16世紀）では、太陽神キニチ・アハウは中年男性として描かれ、鼻筋の通った鼻、大きな四角い目、十字の目、歯には切り込みがある。アステカ帝国（1300-1521）の神話によれば、地球は5つの宇宙時代に5回創造され、5つの異なる太陽神（テスカトリポカ、ケツァルコアトル、トラロック、チャルチウトリクエ、トナティウ）が支配していた。インカ帝国（13-16世紀）では、太陽神であるインティが至上神とされた。

### 5. 4 日本の天照大御神

日本の神道では、太陽の擬人化として天照大御神が崇拝され、女性とみなされてきた。天照大御神を祀る伊勢神宮は、太陽の神聖な存在を称える場とされている。

## 6. 国旗

浅見（2005）は、対照言語学の立場から安藤（1996）を引用し、日の丸の国旗に太陽の連想が結びついていると論じ、さらに太陽を赤と表した夏目漱石の作品にも触れている<sup>10)</sup>。日本の旭日旗（朝日）、日の丸のような伝統的表象が太陽は赤という固定観念をもたらしてきた。

太陽の色と描写は、国家の歴史、信仰、イデオロギーの表象である。国旗や神話などで太陽が黄色く描かれてきたのならば、連想が黄色、赤色ならば連想が赤は、当然の帰結といえる。国旗の太陽の色は、その国の太陽の認識の象徴といえる場合が多い。

アルゼンチン国旗は、青と白の横縞に「5月の太陽」という、顔がついた黄色い太陽がある。この太陽は、32の太陽光線が放射状に広がった太陽神インティを表し、アルゼンチンの先住民族文化を象徴している。



図3 アルゼンチン国旗の5月の太陽

南（2003）は、国旗に描かれた太陽の色をまとめた<sup>11)</sup>。

- ①赤色（3カ国）：日本、バングラデシュ、マラウイ
- ②黄色、金色（9カ国）：モンゴル、フィリピン、カザフスタン、キルギス、キリバス、マケドニア、アンティグア・バーブータ、ナミビア、ルワンダ
- ③オレンジ色（1カ国）ニジェール
- ④白色（4カ国）ラオス、ネパール、マーシャル諸島共和国、台湾
- ⑤黄色い顔（4カ国）エクアドル、ボリビア、アルゼンチン、ウルグアイ

## 7. 黒い太陽

太陽は一般に勝利、生命、善を表すことが多い。中心点を持つ太陽のシンボルは、しばしば統一と求心の意味も示す。（日本の旭日旗も同様の意味がある）黒い太陽とは日蝕の象徴で、日蝕は太陽が月や他の物体によって隠される天体現象である。日蝕は一般に不吉な予兆としてとらえられ、黒い太陽は悪魔礼拝と白人至上主義のシンボルとされてきた。

知名度が高いナチスのシンボルは鉤十字だが、他に

もナチスのシンボルとして「黒い太陽」がある。これらの意味はすべて、ナチスのイデオロギーと世界観に合致し、政党と指導者の強さを中心とした単一民族の統一を意味する。黒い太陽のシンボルには、秘教的な印象を与えるためにルーン文字が放射状に組み合わされている。ルーン文字は古代ゲルマン系民族によって使われ、呪術的な意味合いも持つ。神秘主義に傾倒していたナチスドイツ親衛隊長ヒムラーは、親衛隊にオカルト儀式とシンボルを取り入れたが、そのひとつが黒い太陽といわれる。

2014年のクリミア半島強制併合後、ウクライナの極右勢力が「黒い太陽」を身につけ始めた。ロシアによるウクライナ侵攻の目的は、ウクライナの非ナチス化とプーチン大統領は宣言したが、そのナチス化ウクライナの証左のひとつがこの黒い太陽といわれる。ウクライナ側は、ロシアが領土を侵略するナチスと主張し、お互いにナチスと呼び合いながら戦闘がいまだに続く。

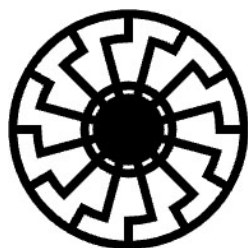


図4 黒い太陽 (Schwarze Sonne)

## 8. おわりに

太陽の色のさまざまな連想と描写は、色彩文化の一側面として興味深い。昼間は白に近く、さまざまな波長の光から成り立つ太陽が、国によって異なる色で連想され、神格化や擬人化もされて描かれた。さらに日蝕のように不吉に感じられる天体現象を示す黒い太陽は、ナチス・オカルト思想の象徴としても使われている。

太陽についての論考は、身近すぎるためか、または直視できないためか、その色の違いについての研究は少ない。異なる諸地域で見える太陽が色の認識にどのような影響を与えるかを議論するには、非常に広範な対象である。したがって、各国で赤・黄・オレンジといった多数派の典型的な太陽の色がなぜ異なるのかを明確に追求するのは難しい。ただし、太陽は環境光、暦、そして人類の世界観に影響を与えるため、色彩感覚の不可欠な基盤であることに疑いの余地はない。

しかし色の認識や描写は、時代や考え方に基づく信仰、政治理念、教育指導によって頻繁に変わるもので、

なんら永続的ではない。つまり2023年7月の日本ではオレンジ色の連想と描写が1位になったが、世界的には黄色が一般的という情報が広まれば、今後、日本も黄色への連想や描写へと合わせていく可能性さえあるのである。

## 謝辞

博報堂雑誌『広告』編集長の小野直紀氏、編集部員の飯田菜々子氏、大塚結良氏、長田諒子氏、データサイエンティストの新倉健人氏、ウェブデザイナーの奥田透也氏に「赤から想起するもの世界100カ国調査」について心より御礼申し上げる。最後に調査監修に推挙くださった三木学氏に感謝申し上げます。

## 参考文献

- 1) 福江純「太陽の色・星々の色」『天文教育』24, No.2, 2012, pp.28-39.
- 2) 三島和夫『ヨーロッパの空から－太陽の色は赤くない－』通商産業調査会, 1987, pp.2-5.
- 3) 日高杏子ら「赤をめぐる色彩文化—国際調査による比較」日本色彩学会第54回全国大会, 2023.
- 4) 小野直紀, 『広告』編集部『広告』Vol.417 特集:文化, 株式会社 博報堂, 2023.
- 5) 佐藤邦夫『日本列島・好まれる色嫌われる色: カラー・ダイレクトとテスト・バラエティー』青娥書房, 1999, p.57.
- 6) Villarroel JD, Villanueva X. A Study Regarding the Representation of the Sun in Young Children's Spontaneous Drawings. Social Sciences. 2017; 6(3):95. <https://doi.org/10.3390/socsci6030095>
- 7) 小高大輔「子どもが描く太陽の色」『天文教育』7月号 (Vol.33 No.4), 2021, pp.6-11.
- 8) レファレンス協同データベース／石川県立図書館 [https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref\\_view&id=1000198884](https://crd.ndl.go.jp/reference/modules/d3ndlcrdentry/index.php?page=ref_view&id=1000198884) (参照: 2023-06-16)
- 9) ビレン, F. 佐藤邦夫 訳『ビレン 色彩学の謎を解く 人類の福祉向上のための色彩心理学と色彩療法』青娥書房, 2003, p.25.
- 10) 浅見吏郎「日英語における太陽の色名に関する一考察—対照言語学的観点から—」『札幌大学総合論叢』第20号, 2005, pp.19-29.
- 11) 南善巳「太陽の色は、赤? 黄? 白? —「日の丸」物語—」『Safety & Tomorrow』No.92, 2003, pp.98-100.